ラスト?クリスマス

サークルO.L.

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ラスト？クリスマス

【Ｎコード】
Ｎ４５９５Ｚ

【作者名】
サークルＯ．Ｌ．

【あらすじ】
クリスマスがあと数日で訪れる。　しかし、主人公は病気でいつ死ぬかもわからない身体。　そんな主人公が送る最後の時間を書いた物語。

第一話、病気と患者。（前書き）

絵は狂風師作。　小説は尖角作です。

もう少しでクリスマスですね。

そんなクリスマスの中で起きる一つの物語をどうぞ。

第一話、病気と患者。

仕事が終わり家に帰ろうと片付けをしていると、そこに龍也(たつや)がやってきた。

私こと岡本志保(おかもとしほ)は、父と同じく医師として働いている。

＞i３７１９６―２４８５＜

私の家では、大体の人が医療関係の仕事をしていて、母は元・看護師である。

そして、そんな二人が父の病院で出会って私が産まれた。

そんな父の病院で働く私のところに、彼氏である桶中龍也(おけなかたつや)はやってきた。

彼「今から、どっか飯でも食いに行くか？」

時刻は２０時半、、、

少し遅めの夜ごはんを食べるために私のところに来てくれた彼に、私は腕組みを後ろでしながら彼の目を覗き込んで言う。

私「どこ行っくの～♪」

すると、彼はこう返すのである。

彼「焼き鳥屋っ！！」

私「え～！また、肉系！？」

そう言って、私は少しオーバー気味にリアクションを取ってみる。

彼「ダメか！？」

「結構、美味いんだけどな・・・」

そうやって、彼が少し寂しそうな顔をするので、私はニコニコしながら言ってあげる。

私「いーよ！」

「じゃあ、着替えてくるから、そこで待ってて～！」

そして、私は彼を病院の待合室のイスに座らせてから着替えに向かった。

私「じゃあ、行こっか？」

私はそう言って、彼の腕に自分の腕を絡ませる。

そんな風に腕組みをして彼にもたれ掛ると、彼は私に向かって言うのである。

彼「何か良い事でもあったのか？」

私「うーん、、、そうだね、、、」

「患者さんの病状が、少しだけ良くなってね～♪」

そうやって、私は笑って見せる。

《けれど、この時の彼は、まだ真実を知らなかった――》

《私が言う「患者さん」というのが、私自身だということを――》

焼き鳥屋に着いた私達は、店内に入ってカウンターに座った。

●

●

●

●

●

●

彼「どれにする？」　そう言って、彼は私にメニュー表を手渡す。

しかし、私はそれを一瞬だけ見て返した。

私「とりあえず、ピーチハイかな？」

「それ以外の注文は任せたっす！隊長！！」

私達は、そんな冗談を言える仲だった。

けれど、私は――――――――――――――――――――。

第一話、病気と患者。（後書き）

絵を描いた狂風師です。
よく見ると（よく見なくても）中心線がずれてます。
下手です。はい。
描き直したかったけど、同じ絵は描けませんでした。

第二話、結婚と諦め。

意識が朦朧とする中、私は彼に支えられて、彼の家まで辿り着くことになる。

彼はどうやら、私のカバンの中を勝手に漁るのは失礼だと思ったらしく、私を自分の家まで運んでくれた。

そして、その後、もちろん彼は――――――。

私を襲うことなく、部屋に一つしかないベッドに寝かしてくれた。

なんと言っても、彼は優しいのである。。。

彼との出逢いは本当に必然的で、私達の母が友人関係であったた

め、私達二人も友人関係というか、幼馴染という関係になった。

そこから徐々に男と女という一対の関係に興味を持つことになり、そして高校三年の夏に私達は付き合うことになる。

それから、十年が経った今、私達の脳裏には“結婚”という二文字がこびり付いている。

だが、それと同時に、私の頭の中には“諦め”という二文字が浮かんでいた――――。

それは、私が病気だから・・・。

二度と治ることのない病気だから・・・。

将来的にはいつか治るようになる病気なのかもしれない。

けれど、今の技術じゃあ、絶対に治るなんてことは――――――。

そんなことは医者であるから、よくわかっている。

だから、せめて私が死ぬまで、彼には私の傍にいて欲しい。

それが、今の私の切なる願いだ――――――。

―●―●―●―●―●―●―

彼のベッドの上で目覚めた私は、彼の布団からほのかに香る匂いに酔いしれようと、布団を鼻の方に手繰(たぐ)り寄せる。

しかし、私の彼は、そんな余裕を私に与えてくれなかった。

彼「おっ！起きたか！！」　そう言って、私に水の入ったコップを手渡す。

『チクショウ！このケチンボ！！』

私はコップを受け取りながら、そんなことを心の中で叫んだ。

でも、ちゃんとわかっている。

見た目こそチャラい彼の心が、私が思うこの世の中で一番優しいものだってことは。

だけどね、　それを知っていることができるのも、あと少しだけなんだよ？

あなたは気付いていないかもしれないし、勘が良いあなたは気が付いているかもしれない、“私の身体がボロボロだということ”――――。

でもね、　時々思うんだ。

『私って、本当に幸せ者なんだ』って――――。

だって、そうでしょ？　大好きな人が、こんなに近くにいてくれるんだよ？

だから、なんだか死を迎えるのも温かく感じるよ。

『それって、とっても幸せなことでしょう？』

今日も私は、そう呟くのだ――――――。

第三話、痛みと我慢。

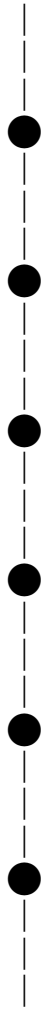
自分が幸せだと思うのなら、苦しくたって歯を食いしばって笑ってみせるよ。

あなたにだけは、見せたくないよ。　私の涙と私の痛み。

言える時は、「たすけて」を。　言えない時は、あなたを見つめて。

大好きなんだよ？愛してるんだよ？　わかっているでしょ、私の気持ち。

それでも、それでも、言っておきます。　あなたにだけの「愛してる」――――――。



私「あ～～～、　完全に2日酔いだぁ・・・」
「キモチワルイーーー」
彼「お前が酔うまで飲むなんて珍しいな？」
「何かあったのか？」
私「別に？何もないけど？」
私はそこで、わざと笑って見せた。

辛くないはずがない――――。
自分の体が限界まで来ているのはわかっている。
でも、今日仕事に行けば明日は休み。
そして、明日は１２月２３日だからクリスマスは――――。

ごめんね、　もう、私ムリっぽいや。

明日はイヴなのに、吐血までしちゃうなんて――――。

ごめんね、　こんなに弱弱しい存在で。

でも、昨日あなたに会うことができてよかったよ。

たぶん、もう会うことはできないけれど、私はあなたの顔を想いながら死ねるから。

ごめんね、　自分勝手な私のままで。

大好きだよ？　たった一人だけのあなたのことが――――――。

――――――●――――――●――――――●――――――●――――――●――――――●――――――●――――――

私は今日、再び病院に運ばれた。

家は小さな病院だから、総合病院に父が電話をしたの。

私の家族は私の病気を知っていたから、私の願いを聞いてくれたの。

“彼には、絶対に言わない事――――――”

けれど、私の家族はそれに条件を付けた。

“絶対に、無理はしない事――――――”

“我慢をするなら、人を頼る事――――――”という二つのこと。

私の彼も、私の家族も、私の周りの人は皆優しい。

だから、私は何の未練も残さないで逝くことができる。

だから、最後に言わせてほしい。

皆に対しての、私からの「ありがとう」を――――――。

第四話、私とあなた。

――――――１１月２４日０時６分２８秒、岡本志保　死亡、、、

私は死んだ。

私は死亡宣告をされた。

母も父も泣いている。

でも、そこに彼の姿はない。

私の彼の姿は、そのどこにもなかった。

今の私から見えるのは、父と母と医者と、そろそろ冷たくなってきているであろう私の身体だけ。

でも、これは私が望んだことだからいいの。

私のこんな姿、彼に見せることなんてできないもの。

私の魂の抜けた身体なんて、何の意味もないもの。

彼が見てくれていたのは――――――――――――。

●――●――●――●――●――●

彼は母からの言葉(しらせ)で、私に会いに来てくれた。

静かに手を合わせ、静かに頭を下げ、静かに席に戻る。

大好きだった彼は、なんだか妙にやつれて見える。

歯を食いしばり、涙を堪えて、それでも瞳は濡れていて。

なんだか、とても切なく感じる。

手を伸ばして拭ってあげたいけれど、絶対に触れることはできなくて。

ごめんね、　私の所為で泣くことになってしまって。

ごめんね、　あなたに本当のことを言わなくって。

許してね、　あなたよりも早く死んでしまったことを。

忘れてね、　こんな私のことは――――――。

大好きだったよ、　たった独りだけのあなたのことが。

幸せだったよ、　あなたの傍に居ることができて。

ありがとね、　一生分の幸せを私にくれて――――――。

第五話、死人と笑顔。

私は車で運ばれる身体について行く。

と言っても、この場合は“憑いて行く”の方が正しいか・・・。

まぁ、そんな冗談を言っても、さっきまで入っていたからだが焼かれるというのはなんて悲しい事なのだろう。

彼に触れたことは覚えていても、彼に触れた感覚はない。

私は見つめることができても、彼の瞳に私は映らない。

それが、とても寂しくて――――――――――――。

●――●――●――●――●――●

“ピーーーーーーーー”

私の体を焼くために、スイッチが押された。

皆が、私のために泣いてくれる。

それは、なんて嬉しい事なんだろうか？

身体が焼かれたためか、透けていた身体が、さらに薄くなっていく。

『あぁ、私　消えるんだなぁ・・・』

私は咄嗟に、そう思った。

もう見ることができない彼の顔が、涙で濡れている。

『最後位は笑って欲しかったなぁ――――』

そう思ったけれど、私は我慢して彼に向かって叫ぶ。

「大好きだよ、　龍也！！」

「ありがとね、　龍也！！」

それが、場に似合わない位の大声だったとしても、これは私の葬式なんだから――――。

あぁ、私・・・死にたくなんてなかったよ。

皆の“幸せ”を願っても、　私は“幸せ”になることができない。

大好きな龍也を残して“逝く”なんて嫌だよ！

そんな願いも叶わないのなら、身体と一緒に“思い出”も消えてしまえばいいのに。

でも、そんなことをすれば、大切な時間も大切な人も、すべて忘れてしまう。

私は絶対に忘れたくなんてないよ。

たった一度だけの人生でも、あなたは悔いのない相手だったから。

だから、そんな私の為に笑ってよ、、、　　最後の一回だけでいいから、、、

第五話、死人と笑顔。（後書き）

みなさんは、どんなクリスマスをお過ごしですか？

楽しいクリスマス？悲しいクリスマス？　さて、どんなものでしょうか？

私は今回、一つの幸せの形を書きました。

人によっては幸せではないと思うかもしれませんが、
私は誰かを想って死ねることは幸せなことだと思います。

そんなことを感じ取ってくれたなら幸いです。ありがとうございました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4595z/

ラスト?クリスマス

2011年12月25日20時57分発行